イケメン教師の受難

伝説の水泳大会篇

第七巻　全校生徒の前で逆立ち引き回し

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　鉄球に襲われる股間
■海老沢薫ＢＬＯＧ
■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

※海老沢薫ＢＬＯＧ
http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

・・・サイドストーリー『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』や、最新作の出版情報、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■著作権について

「イケメン教師の受難　伝説の水泳大会篇　第七巻　全校生徒の前で逆立ち引き回し」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

水泳大会で一年生のクラス対抗千メートルリレーに強制参加させられ、背泳ぎだけで千メートルを泳がされることになったイケメン教師の三神真琴。

担任するクラスの生徒、相葉の悪戯により真琴の下半身には二つの鉄球のおもりがぶら下げられ、真琴は全身を襲う快感によって、なかなか思うように泳ぐことができなかった。

そのため、他のコースを泳ぐ生徒達が次々とゴールする中、真琴一人だけがプールの中を懸命に泳ぎ続け、全校生徒の晒し者となった。

やがて、真琴はプールの中で幾度となく射精しながらもどうにかゴールを果たしたが、最下位になった事で罰ゲームを科せられる。

哀れなイケメン教師に与えられた新たな罰ゲーム、それはプールサイドを逆立ちで十周することだった。

而して、プールサイドへと上がった真琴は

一糸纏わぬ姿のまま逆立ちし、三年生の男子生徒二人に両脚を支えられながら歩き出した。

生徒達は素っ裸で逆立ちして歩くイケメン教師のセクシーな姿に興奮し、胸の奥で欲情を滾らせながら卑猥な罰ゲームの様子をじっくりと見守った。

すると、罰ゲームが行われている最中、プールサイドにアナウンスが流れ、逆立ちで歩く真琴に対し笑顔を浮かべるよう新たなルールが科された。もし僅かでも笑顔を崩した場合にはさらに一周が追加されることになり、真琴は心の中で泣き叫びながらもゆっくりと口角を上げ、引きつった笑顔を浮かべていった。

素っ裸で逆立ちしながら歩くイケメン教師が笑顔を浮かべると、プールサイドに座る生徒達は歓喜し、高校の水泳大会はイケメン教師の過激なストリップショーと化してゆくのだった。

■第一章　鉄球に襲われる股間

高校の水泳大会が行われている屋外プールでは、イケメン教師の三神真琴がプールの中を素っ裸で背泳ぎしながら泳いでいた。その大きなイチモツには鉄球のおもりが結びつけられ、泳いでいると水の抵抗を受けた鉄球がイチモツを扱いて真琴を快感責めにした。

そのため、他のコースを泳いでいた一年生の生徒達が全員ゴールしたにも関わらず、快感のせいで思うように泳ぐ事のできない真琴は、ただ一人まだ五百メートル近くも泳がなければならない状況だった。

プールサイドにいる全校生徒や同僚教師達はプールの中を素っ裸で背泳ぎするイケメン教師にギラギラした視線を向け、その逞しい肉体を興奮した様子で見つめていた。

すると、真琴の担任するクラスの男子生徒、相葉が、水泳大会を仕切るベテラン男性教師の所に行き何やら囁きかけた後、不意にプー

ルの中に飛び込み、背泳ぎする担任教師の元へと泳いで近づいていったのだった。

そして、真琴の傍まで来た相葉はその剥き出しの玉袋に強引に新たな鉄球のおもりを結びつけていった。

「あぁっ、何をするんだ！」

真琴は予期せぬ事態に驚き、思わず泳ぐのを止めて相葉を叱責した。

「先生、これを付けたまま最後まで泳ぐんだ！命令に従えないなら、先生の恥ずかしい写真をネットで世界中に拡散するからな！」

相葉がそう言って脅迫すると、真琴は急に大人しくなり、プールの中でガックリと項垂れた。

「三神先生、何やっているんだ！サッサと泳ぎなさい！」

競技の途中で泳ぐのを止めたイケメン教師に対し、ベテラン男性教師がプールサイドから拡声器を使って注意した。

「先生、それじゃあ最後までしっかり泳ぐん

だぞ！」

相葉はそう言うと、再び泳いでプールサイドへと戻っていった。

プールのど真ん中に一人取り残された真琴は、股間にのしかかる鉄球の重みに表情を歪め、絶望感に打ち拉がれた。イチモツだけでなく玉袋にまで鉄球を結ばれた状態で泳ぎ出せば、さっきまでよりもさらに強い快感が下半身に襲い掛かるのは容易に想像できた。

そうなれば、すでに火照った体はたちまち射精へと追い込まれ、プールサイドにいる全校生徒の前でまたしても死ぬほど恥ずかしい姿を晒すことになるのだ。

どうすればいいんだ・・・。真琴はプールのど真ん中に立ち尽くしたまま、プールサイドで不敵な笑みを浮かべる相葉を恨めしそうに見つめた。

「三神先生、いい加減にしないか！早く泳ぎなさい！」

ベテラン男性教師の怒声が拡声器を通じてプ

ール全体に響き渡った。

「は、はい・・・」

先輩教師の怒声に怯えた真琴は思わずそう返事すると、仕方なく再び背泳ぎで泳ぎ始めた。

「あぁぁっ」

水を掻き分け泳ぎ出した瞬間、イチモツと玉袋に結ばれた鉄球のおもりが股間を刺激し、真琴の全身に強い快感が駆け抜けた。

そして、新たなおもりが加わった事によって、真琴の泳ぐ速度はさらに遅くなり、このままでは残り五百メートルを泳ぎ終えるのにどれくらい時間が掛かるか全く分からなかった。

『三神先生、水泳大会の進行が遅れています ので、速く泳いでください！』

プールサイドのスピーカーから進行係の女子生徒のアナウンスが響き渡り、プールの中を背泳ぎする真琴の耳元にもしっかりと届いた。

あぁっ、これ以上速く泳ぐなんて無理だ、あぁぁっ、このままじゃまたイッてしまうか

もしれない・・・。真琴は必死に両手で水を掻き分け両脚で水面を蹴って、少しでも速く泳ごうとしたが、イチモツと玉袋に結びつけられた鉄球のおもりがそれを許さなかった。

「あぁっ、あぁぁっ」

イケメン教師が泳ぎながら放つ喘ぎ声はだんだん大きくなり、プールサイドにいる生徒や同僚教師達にまでハッキリと聞こえた。皆、その声に射精の瞬間が迫っている事を予感すると、プールの中を泳ぐイケメン教師の姿を瞬きを惜しんで見つめた。

そうして、真琴がようやく六百メートルを泳ぎ終えた頃、その瞬間は訪れた。背泳ぎする真琴の体が突如水面でトビウオのように跳ね、イチモツから白濁の汁が勢い良く噴き上がったのだった。

「オオッー」

プールサイドには生徒達の感嘆の唸り声が響き渡り、その後プール全体が大きな拍手に包まれた。

真琴は虚ろな目で空を見上げながら、暫し水面を漂っていた。またしても全校生徒が見ている前で泳ぎながら射精してしまったという事実を、真琴はなかなか受け入れる事ができなかった。これは全部夢に違いない、僕はきっと悪い夢を見ているだけだ・・・。真琴は水面を漂いながら自分自身にそう何度も言い聞かせた。

「三神先生、早く泳ぎなさい！」

再びベテラン男性教師の怒声が拡声器を通じてプール全体に響き渡った。

その声を聞いた真琴は一瞬で現実へと引き戻され、自分が今悪夢のような現実を漂っている事を思い知らされた。そしてその現実から逃れるように全力で背泳ぎを始めたが、イチモツと玉袋に結ばれた鉄球の力によってその勢いはすぐに失われていった。

「あぁっ、あぁぁっ」

真琴の半開きになった口元からは絶え間なくオスの喘ぎ声が漏れ出し、その端正な顔立ち

は再び淫らに歪んでいった。

「先生射精したばかりなのにまた感じてるみたいだぜ（笑）」

「これじゃあ千メートル泳ぎ切るまでの間にあと五、六回は射精するんじゃね（笑）」

「俺、こんな先生の汁塗れのプールで泳ぎたくねぇよ（笑）」

プールサイドにいる生徒達は、背泳ぎしながら悶えるイケメン教師を半ば呆れた様子で見つめ、その姿を嘲笑った。

プールの中を懸命に泳ぐ真琴はイチモツと玉袋に結びつけられた鉄球の重みに苦戦し、泳ぐスピードはなかなか上がらなかった。まだ残り三百メートル近くも泳がなければならないというのに、真琴は再び下半身から伝う快感に全身が侵され、射精寸前まで追い詰められようとしていた。

あぁっ、もうダメだ・・・またイッてしまう・・・。真琴は全校生徒の手前、なんとかこれ以上の射精は避けたかったが、鉄球に扱

かれ続けてはもう我慢できなかった。

「あぁぁぁっ」

プールにイケメン教師のオスの喘ぎ声が響き渡ると同時に、またしても真琴のイチモツから白濁の汁が勢い良く噴き上がった。

しかし、もう生徒達の間から感嘆の唸り声が起きる事はなかった。皆、イケメン教師の射精を見慣れたせいか、特に驚いたり興奮したりする様子もなく、ただ平然と見つめるだけだった。

真琴は暫くの間、水面を漂い快感の余韻に浸った後、再び背泳ぎでプールの中を泳ぎだした。いつしか生徒達の歓声もヤジも聞こえなくなり、プール全体が静寂に包まれ、その中を泳ぐ真琴はどうしようもない不安と恐怖に襲われた。なぜなら、全校生徒が教師である自分に呆れ果て、何の興味も関心もなくなり完全に彼らに見放されてしまったように思えたのだ。

生徒に軽蔑されるのと無関心にならられるの

とでは、無関心にならられる方が教師としては辛かった。それは生徒の心の何処にも自分が存在していない事を意味し、教師としての存在意義を否定されたようなものだった。真琴はプールの中を背泳ぎしながら、今は恥ずかしさよりもむしろ虚しさを感じていた。

それから、真琴は静寂の中を背泳ぎで懸命に泳ぎ続けた。静まり返ったプールには真琴のオスの喘ぎ声だけが響き渡り、やがてそれは雄叫びへと変わって、真琴は今日何度目かの射精を果たすことになった。

しかし、相変わらず生徒達は静まり返ったまま、イケメン教師が射精してももはや何のリアクションも示さなかった。快感の余韻から覚めた真琴は静まり返ったプールの雰囲気に恐怖を覚えながら、再び背泳ぎを始めた。

あぁっ、もうヤジでもいいから何か声を掛けてくれ・・・。真琴は背泳ぎしながら心の中で生徒達に向かって叫んだ。プールの中をこんなにも恥ずかしい姿で泳いでいるのに、

生徒達から何のリアクションもないことが信じられず、自分が透明人間にでもなってしまったのではないかと疑いたくなるほどだった。

それでも、真琴の願いも虚しくプールは静寂に包まれたまま、真琴は喘ぎながら泳ぎ続け、鉄球のおもりによってイチモツを扱かれ幾度となく射精を果たす事になった。あぁっ、僕は一体なんなんだ・・・。静寂の中で射精を重ねる内に、真琴は自分という存在が一体何者なのかさえだんだん分からなくなろうとしていた。

■海老沢薫ＢＬＯＧ

http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

・・・連載小説『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』や最新作の出版情報、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=36195

・・・二十五歳のイケメン教師、三神真琴はその端正なルックスと気さくで優しい人柄から勤務する高校で女子生徒達のアイドル的存在だった。

しかし一方で、そんなイケメン教師の事を良く思わない男子生徒達もおり、ある日の放課後、真琴は担任するクラスの生徒達の罠に嵌まり、教師生命を脅かすほどの弱みを握られてしまう。

その日から真琴は担任するクラスの生徒達に脅迫されるようになり、自身の教師人生を守るために彼らの奴隷として服従するようになる。

時に教師としてのプライドはおろか一人の男性としての尊厳までを奪われるような屈辱を味わい、どうしようもない自己嫌悪に陥る

こともあったが、それでも真琴は生徒の奴隷として日々懸命に戦っていた。

そうして、学園の一大イベントである運動会の季節が訪れ、真琴はそこでもクラスの生徒達に脅迫されてしまう。

運動会はイケメン教師の羞恥ショーと化し、真琴は全校生徒や同僚教師、観戦に訪れた大勢の父兄達が見つめる前で、途轍もない生き恥を晒すことになるのだった。

『イケメン春輝　二十歳の憂鬱』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764

・・・大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステージ上で罠に嵌められ、大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。

それでも見事グランプリを受賞した春輝は、セレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。

数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。

今年のグランプリ受賞者の春輝は、学園祭のステージ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅された春輝は仕方なく撮影に応じることにな

り・・・。

後日、早速授業中の大教室で撮影をすることになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命じられるまま服や下着を脱いでいき、一糸纏わぬ姿でポーズを披露する。

そうして撮影はだんだんエスカレートしていき、イケメン学生は授業中の大教室だけでなく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄を味わうことになるのだった。

『イケメン社長　聖哉２５歳　―体を賭けた屈辱の取引―　大型ショッピングモール編』

https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357

・・・吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。

しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。

かつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長　聖哉２５歳　一体で償う屈辱のクレーム　会議室篇』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623

・・・２５歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であった。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入った。取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。

而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を起こした当事者である聖哉の会社の社員が現れ・・・。

平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈辱的な命令を突き付ける。

社長としてのプライドだけでなく、一人の人間としての尊厳までも奪われるような命令に聖哉は憤りを覚えずにはいられなかったが、自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地獄へと堕ちていくのだった。